

連載

線虫研究の過去・現在・未来

その1 線虫研究を振り返って

丸和バイオケミカル株式会社 技術顧問
元農研機構 中央農業総合研究センター
(現中央農業研究センター)

水久保 隆之 (みずくぼ たかゆき)

I 序

私は平成27年度末日(2016年3月)で国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)の中央農業総合研究センター(現中央農業研究センター,以下農研センター)を定年退職した。今般,本誌編集室より,線虫に関する標記の執筆依頼を受け3部構成で連載することになった。初回はいささか個人的な話題で恐縮ではあるが,このような体験記にも少しは植物防疫関係者に役立つ情報もあろうかと思慮する次第で,ご寛容をお願いしたい。

1 線虫を始めた経緯

私の線虫研究の出発点は農業技術研究所(農技研)である。この研究所は昭和58年(1983年)に改組して,経営や育種部門を農研センターに移したのち,農業環境技術研究所(現農業環境変動研究センター,以下農環研)と農業生物資源研究所(同生物機能利用研究部門)に分かれた。私はまさに最後の新人として,農技研の終焉に立ち会ったわけである。農技研は部科制で,岩田俊一氏が病理昆虫部長,桐谷圭二氏が昆虫科長でおられた。私は最初長崎県に就職したが,つくばの土木研究所にいた友人に勧められてその気になり,26歳のとき国家公務員試験を受けた。公務員試験の二次試験の合格通知を受け取って,本省の面接も済んだあとで,恩師の平嶋義宏教授(九州大学昆虫学教室)にご報告したところ,すぐに農技研の科長の面接を受けなさいとのこと。霞が関の本面接で,稲の育種部門への採用を提示されて(まあいかと)同意していたことは深く考えなかった。ともあれ,言われるままにつくばに発った。そのときの昆虫科長は梅谷献二氏であった(翌年農技研に赴任してみると,梅谷氏は農研センターの病害虫防除部長に転出された後だった)。梅谷科長がおっしゃるには,昨年(1981年),珍しくも,害虫学専攻の学生の大量合格があり,害虫の研究室がここぞとばかりに彼等を採用したばかりだ,すまないがもう虫の空きはない,線虫なら空いているがどう

だとのこと。線虫の知識はほとんどなかったが,稲の研究より虫に近い線虫がマシに思えたので,喜んで同意した。このようにして梅谷科長との面接で線虫研究への道が決まったのである。農技研の科長の人事権が強かったことを物語るエピソードである。

2 線虫研究室への配属

農技研の線虫研究室は西沢 務さん(当時50歳代前半)が室長で,また7歳年上の皆川 望さん(当時34歳)がいた。以前は,岡本好一さんという研究員がおられたそうだが,この方は私が入る前に白血病を発症してご逝去されていた。岡本さんの奥様がやはり農業技術研究所の研究で,奥様からご主人の遺品の書籍を幾冊も頂戴したが,岡本さんの身代わりのような気持ちで接してくださったのだろう。書籍は後々たいへん役に立った。

3 論文志向主義と出会う

研究室配属までの6か月間は研修期間であった。新人は所内の研究科をあまねく訪問してレクチャーを受けることになっていた。桐谷圭二昆虫科長を科長室に訪問したとき,応接机には便座に腰掛ける人形が置いてあった。その台座にNo job is finished until the paperwork is doneと記され,桐谷科長がこれを指差してこの意味がわかるかと私たちの顔を眺めた。ペーパーワークが尻拭いと論文作成を掛けている。これは論文を書かないと研究が終わったとはいえないってことですね,と私は即答した。その通りだと桐谷科長からいわれて,いささか得意だったが,これは当たり前で,私は学生のときに桐谷さんのご著書を何冊か読んでいたので,彼の論文を残さなければならぬという主張が,もう頭に入っていただけのことである。論文主義はなにも桐谷さんだけの志向ではなくて,当時の農業技術研究所がはっきりと掲げていたモットーでもあった。世界に比肩する研究が農業技術研究所にいる方々の目標で,その研究論文は当然英文でアウトプットされねばならないのであった。伊藤嘉昭先生の著書ではないが「基礎的なことが最も応用的だ」という雰囲気が昆虫科に限らず農技研にはあった。若手